

<総括>

出題数	現代文 2題・古文 1題	試験時間	90分
-----	--------------	------	-----

- ・友人との思い出を通して、人間関係の本質と言葉がもつはたらきと関わらせて述べた随筆からの出題。
- ・本文の分量は昨年度よりも僅かに減少している。すべて記述説明であり、設問数も四問と変化はみられない。解答欄の行数の合計も昨年度(13行)と同じで、変化はなかった。
- ・本文の分量の微減はみられるが、総合的にみて、全体の難易度は、ほぼ例年並。
- ・昨年度同様、本文は文理共通だが、理系では文系で出題された問五がなく、全四問の出題となっている。

<本文分析>

大問番号	□
出典 (作者)	西谷 啓治 「忘れ得ぬ言葉」(一九六〇年)
頻出度合 ・的中等	なし
分量 前年比較	分量(減少・ やや減少 ・変化なし・やや増加・増加)
難易 前年比較	難易(易化・やや易化・ 変化なし ・やや難化・難化)

<大問分析>

大問	ジャンル	設問	設問形式	難易度	コメント(設問内容・答案作成上のポイントなど)
□	随筆	問一	記述式	標準	傍線部の理由を説明する問題。(解答欄3行) 「忘れ得ぬ言葉」という表現に注目し、他の設問との関わりも考慮して解答することが求められる。
		問二	記述式	標準	傍線部の内容を説明する問題。(解答欄3行) 傍線部前後の内容から、「罪」のなさ、「それ自身」の「罪」とを区別して説明することに留意する。
		問三	記述式	標準	傍線部の内容を説明する問題。(解答欄3行) 「世間知らず」の「以前に言われた」意味と「別の意味」との相違を明確にするよう工夫する。
		問四	記述式	標準	傍線部の理由を説明する問題。(解答欄4行) 「全く別」という表現に注意して、比べられているものの二つを明確に説明し分けることに留意する。

※難易度は5段階「難・やや難・標準・やや易・易」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

<学習対策>

- ・評論であれ随筆であれ、文章の主題や筆者の主張を全体からの確に把握するとともに、個々の文脈を丁寧にたどって正確に押さえる読解力が不可欠である。
- ・設問の意図を踏まえ、理解した内容を簡潔かつ的確に表現してみる訓練が欠かせない。
- ・今年度も、漢字問題は出題されなかったが、読解力養成の前提として、その知識の蓄積を怠らないこと。

<総括>

出題数	現代文 2題・古文 1題	試験時間	90分
-----	--------------	------	-----

- ・五七の韻律をそなえた定型に歌人の詩想を凝縮して表現するという、古代から変わらない短歌を詠むことの困難さを論じた文章。
- ・問題文は比較的読みやすいが、解答に必要な内容を過不足なく読み取り、それらを解答欄に収まるようにまとめるのは容易ではない。

<本文分析>

大問番号	□
出典 (作者)	岡井 隆 「韻と律」
頻出度合 ・的中等	なし
分量 前年比較	分量 (減少・やや減少・ 変化なし ・やや増加・増加)
難易 前年比較	難易 (易化・やや易化・ 変化なし ・やや難化・難化)

<大問分析>

大問	ジャンル	設問	設問形式	難易度	コメント (設問内容・答案作成上のポイントなど)
□	評論	問一	記述式	標準	傍線部のように筆者が考える根拠を説明する問題。 (解答欄3行) ※最初の意味段落の論旨を踏まえて説明する。
		問二	記述式	標準	傍線部の理由説明問題。(解答欄3行) ※二つ目の意味段落の論旨を踏まえて説明する。
		問三	記述式	標準	傍線部の内容説明問題。(解答欄3行) ※本文で論じられている短歌の本質を踏まえ、斎藤茂吉の作歌の態度の特性を説明する。

※難易度は5段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

<学習対策>

- ・□は理系の単独の出題であるが、理系の受験生にとって問題の水準は決して平易とはいえない。共通問題□のレベルにも対応できるように学習しておきたい。
- ・文章のジャンルを問わず、単に字面を追うのではなく、その主題を本文全体からの確に把握するとともに文脈を精確に理解する読解力と、その内容を適切に説明する記述力が不可欠である。

<総括>

出題数	現代文 2題・古文 1題	試験時間	90分
-----	--------------	------	-----

- ・室町時代の歌論からの出題であった。歌論からの出題は昨年と同じである。
- ・昨年と同様、解答数は三つであった。
- ・設問構成は昨年と同じで現代語訳一つと、説明問題二つであった。
- ・昨年は和歌の一部の現代語訳の設問があったが、今年は本文に和歌がなかった。

<本文分析>

大問番号	三
出典 (作者)	『正徹物語』 (室町時代の歌人正徹)
頻出度合 ・的中等	稀
分量 前年比較	分量 (減少・やや減少・変化なし・ やや増加 ・増加) 約460字 (前年約419字)
難易 前年比較	難易 (易化・やや易化・ 変化なし ・やや難化・難化)

<大問分析>

大問	ジャンル	設問	設問形式	難易度	コメント (設問内容・答案作成上のポイントなど)
三	歌論	問一	記述式	標準	「適宜ことばを補いつつ」という条件付きの現代語訳問題。「この詞」「かくは」を具体化する必要がある。「ば」「え」「まじき」「よ」が訳出のポイント (解答欄2行)
		問二	記述式	標準	理由の説明問題。「我が歌の位のあがることも有るまじきなり」となる理由を説明する。傍線部の前の該当箇所を設問に合わせて要約する。(解答欄3行)
		問三	記述式	標準	『歌を沙汰ある』の意味を明らかにしつつや「本文全体を踏まえて」という条件付きの理由説明問題。「歌を沙汰あるが第一の稽古なり」の理由を説明する問題であるが、「歌を沙汰ある」の意味を明らかにすることがポイント。さらに、冒頭の「歌詠みは才覚をおぼゆべからず」や、傍線部の後の内容を設問に合わせて要約する必要がある。(解答欄3行)

※難易度は5段階「難・やや難・標準・やや易・易」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

<学習対策>

- ・昨年につづいて歌論からの出題だった。昨年は近世、今年では中世からの出題であったが、時には平安時代の作品も出題されているので、いろいろな時代・ジャンルの文章に慣れる必要がある。
- ・主語、目的語、指示内容などを考えながら、文章全体の内容を正確に理解する練習を平素からおこなっておくこと。それによって説明問題にも対応できるのである。
- ・本文全体を現代語訳できるかどうか京大理系古文の根本である。現代語訳をする練習がいちばんに望まれる。
- ・今年では和歌の解釈問題が出題されなかった。年によっては、和歌の出題を見るので、修辭、現代語訳、趣旨の説明など、和歌の対策は必ずしておきたい。